

# 基幹格としての「が」とその特性

## —日本語格助詞試論 1—

加藤重広

本論では、日本語の格助詞のいくつかを取り上げて個々の用法について整理した上で、それぞれの助詞の本質的な特性を、日本語の言語的な特性と関連づけて論じる。そこから、言語類型論的に日本語の文構造を捉え直す際に、重要な意味を持つ現象を明らかにすることを目的とする。

### 1. 助詞の特性と分類

日本語の助詞類は、言語類型論的に見れば後置詞 (postposition) に数えられることが多い。これは、西欧語の前置詞 (preposition) に対応して、もっぱら名詞句との位置関係に基づく命名がなされているのに過ぎないとも言える。そのために、類型論的な特性を概略的に記述する際には、「英語は前置詞を用いて格標示を行い、日本語は後置詞を用いて格標示を行う」としても問題はないだろうが、細かに個々の前置詞や後置詞 (以下、両方をまとめて「側置詞」と呼ぶ) の用法と機能について、制約と拡張性を見ていくと、このような大づかみな記述から逸脱する現象が少なからず観察される。

- 1) 太郎からと花子からとの情報を総合すると…
- 2) 金沢から富山までだけよりも…

(1)の下線部の「と」は欠落しても成立するが、「名詞あるいは名詞を主要部として全体が名詞の性質を持つ句に後置詞は後接する」という規則を仮に立てると、(1)の「と」や「の」、また、(2)の「だけ」「より」「も」はこの規則に従っていないことになる。

英語でも、(3)(4)のような表現では、下線部の1つ目の前置詞は、少なくとも「名詞あるいは名詞を主要部として全体が名詞の性質を持つ句に前接する」という規則に背馳する用法と見なさざるを得ない。

- 3) I did not see Brian till after the party.
- 4) She lives just from across the street.
- 5) The magician emerged from behind the curtain.

もちろん、文法的な記述としては複合的な前置詞という概念を立てて、2つの前置詞が組み合わさって1つの前置詞の機能を果たすとすることは可能であるし、実際に「二重前置詞」あるいは complex preposition とする記述も見られる。これは、これらの前置詞の機能や生産性を重視しない立場だとも言えるが、網羅的に記述を行う段階ではやむをえまい。

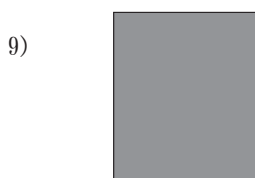
日本語の格助詞が、狭い意味での "格" だけを意味していて、予め設定した意味役割に分類しきれないのであれば、格助詞の記述として、また日本語の記述として、これほど楽なことはない。しかしながら、言語は言語研究者にとって分析しやすく記述しやすいようにできているとは限らないし、研究者の便宜で対象とする言語の真の姿をゆがめてしまうことは避けなければならないと考える。たとえば、格助詞カラには副助詞などと連続性をもつ用法があることはつとに指摘されているが、どこまでを格助詞とするかについては検討を要するところである。

### 1.1. 格助詞と副助詞の連続性 —カラを例に—

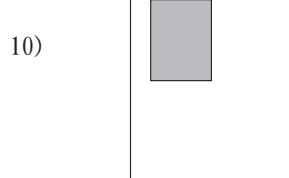
格助詞のカラと副助詞のカラには共通する性質があり、統語的なふるまいと機能の違いを考慮しても、両者間の連続的な関係は無視できず、品詞の異なるカラとして一線を画することをためらわせるものがある。以下で、例文を検証しながら、カラについて見ていくが、これはマデについてもおおむね同じ見方が成り立つと思われる。

- 6) 山下さんがテキストの第5節を読んだ
- 7) 山下さんがテキストの第5節から読んだ。
- 8) 山下さんからテキストの第5節を読み始めた。

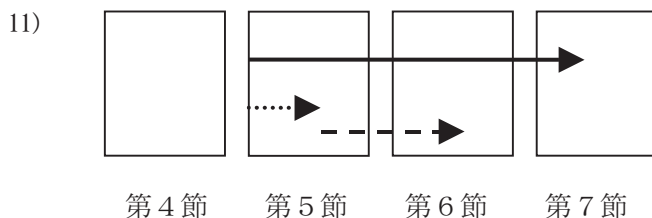
(6)のヲは「テキストの第5節」が「読む」という行為の対象であることを示しているが、第5節全体を読んだのか(→(9))、第5節の一部(→(10))を読んだのかはわからない。つまり、「読む」という動作の対象が「テキストの第5節」の部分集合であればよい。一方、(7)は起点が「テキストの第5節」にあるのであって、結果的に「第5節」の一部しか読まないという解釈(→(11)の点線)も、続けて「第6節」や「第7節」へと読み進むという解釈(→(11)の実線)も排除されない。また、「第5節」の「冒頭」が起点(→(11)の実線)であっても、「途中(のどこか)」が起点(→(11)の破線)であってもよい。



第5節



第5節



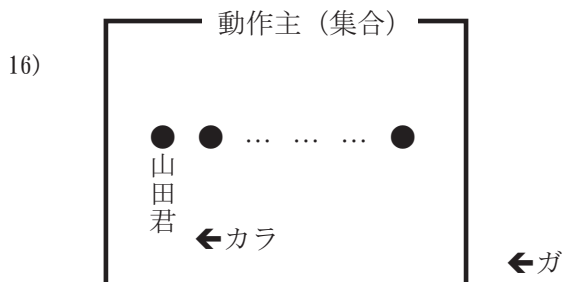
つまり、(6-8)のカラとヲは、「読む」という動作と「第5節」の意味的な関係を示すという点で、格の標示の機能を担っていると見て差し支えないだろう。しかし、同じように考えられる例ばかりではない。

- 12) 山田君から順にバスを降りてきた。  
 13) この件については、課長から説明します。

(12)のカラは、「バスを降りてくる」という行為を行う動作者が複数おり、その動作を行う順番に並べたとき、第一の動作者となるのが「山田君」であることを表している。「山田君」は動作者でもあるから、次の(14)のように言うことも可能である。また、動作者全体を表して(15)のように言うことも可能であるが、この場合ハを格助詞で表すとすればやはりガを使うことになるだろう。

- 14) 山田君がバスを降りてきた。  
 15) 3年2組の生徒たちは、山田君から順にバスを降りてきた。

複数の動作者がいるとき、最初の動作者となる者は、動作開始順の序列において起点となる。つまり、(12)のカラではカラの持つ起点の意味は生きている。しかしながら、(12)において「山田君」は「バスを降りてくる」という動作の動作主でもある。動作主の集合のなかで動作順の序列を設定したとき、その筆頭に「山田君」が位置し、その位置が起点と解釈できるに過ぎない。(15)における「3年2組の生徒たち」はガで「降りてくる」動作を行うものであることがマークされ、その集合における序列の起点がカラで示されることになる(→(16)のカラとガ)。



つまり、(12)(15)でのカラは、起点の意味を、派生的なものであるにせよ、持っていることになる。このカラが、動作主をマークするガと平行して、序列上の起点を表しながら共起することに論理的な矛盾はない。むしろ動作主が複数存在すれば、それらの間になんらかの順序や序列が発生することは自然なことだと言えるだろう。動作主であることと動作主という集合のなかの序列の筆頭であることは、1つの動詞句に対して共起可能な要素なのである。

## 1.2. 助詞の融合に見る不連続性

もちろん、カラは、糸井通浩(2002)などに言うように、格助詞と副助詞の双方の用法を持つと考えることのできる助詞でもある。(12)(15)のカラを、序列上の起点であって時空間における起点ではないことを理由に、格助詞でなく副助詞だと判断することもあり得る。例えば、以下のような用例はそういった考えをサポートするものになりうる。

17) このテレビから修理します。

18) 寄付金集めは、近くの小学校から行くことにしました。

(17)のカラは、修理の対象となるものが複数あり、最初に「このテレビ」を修理することを意味する。また、(18)のカラも行き先が複数あることが前提になっており、訪問の序列の第一番目に「近くの小学校」があることを示している。

これらを助詞の融合と考えれば、《格助詞+副助詞》の組み合わせでは格助詞がより基幹的なものであればあるほど融合によって消失しやすいという点で同じ特性を持つ。本稿では、ハやモなど従来係助詞とされることが多かったものも副助詞に含めて扱う。ハ・モとの格助詞の一般的な融合は以下のようにまとめることができるだろう。<sup>1)</sup>

|       | ガ | ヲ | ニ    | ト  | デ  | カラ  | マデ  | ヨリ  |
|-------|---|---|------|----|----|-----|-----|-----|
| ハとの融合 | ハ | ハ | ハ/ニハ | トハ | デハ | カラハ | マデハ | ヨリハ |
| モとの用法 | モ | モ | モ/ニモ | トモ | デモ | カラモ | マデモ | ヨリモ |

1) ハはニの用法の一部とほぼ重なるのでここでは考察の対象としない。また、ニをはじめ、デやトなどでも意味用法によって、融合の成立に分布上の違いが見られる。例えば、移動の着点を表す用法の二格では「太郎は学校 {には / は} 行かなかった」のように融合も非融合も成立するが、受動文で動作主をマークする二格では「太郎は母親 {には / \*は} 叱られなかった」のように融合は成立しない。また、ヲとの融合に関しては文語形として「ヲバ」が、方言形として「バ」が見られること、「モ」の意味がやや異なるが「ヲモ」という形が見られることを考慮すべきだろう。しかし、これらは「ニハ」「ニモ」と「ハ」「モ」の関係のように、後者が可能な場合には前者に置き換えることが可能で意味的な差異もないケースとは同じように扱うわけにはいかない。格助詞に階層性を想定する立場をとるなら、①ガ、②ヲ、③ニ、④その他の格助詞、といった階層を考えることができるだろう。

これまでに見た例のうち、(12)はガ格と副助詞カラの融合、(17)はヲ格とカラの融合、(18)は二格とカラの融合と見ることができる。しかし、順番の上での起点という解釈が適用できそうな場合でも、ト格やデ格では、融合が成立しただけでなく、非融合であっても成立しにくい。

19) 私は、これから5人の出場者と順番にデュエットをすることになっている。最初に和歌山県の鈴木さんと歌うことにした。

20) ボールペンと鉛筆と万年筆のうち、どれが書きやすいか試してみることにした。最初に便せんにボールペンで書いた。意外と書きやすかった。

(19)では「(最初に…)鈴木さんと」が、(20)では「(最初に)ボールペンで」が、それぞれト格、デ格のついた序列上の起点解釈をとる名詞句となる。起点解釈をカラで表すことができるかを(21)(22)のようにして確かめてみよう。

21) 私は、これから5人の出場者と順番にデュエットをすることになっている。和歌山県の鈴木さん {\*から / \*とから} 歌うことにした。

22) ボールペンと鉛筆と万年筆のうち、どれが書きやすいか試してみることにした。便せんにボールペン {\*から / \*でから} 書いた。意外と書きやすかった。

(19)(21)は、いわゆる「相手のト」の用法であるが、融合するにせよ、しないにせよ、起点を意味する副助詞のカラとト格はそもそも共起できないと見てよいだろう。(20)(22)のデ格は、道具や手段を表す用法であるが、同じように考えることができる。

23) その立候補者は、最初に駅前で演説を行い、次に市役所前で演説を行った。

24) その立候補者は、駅前 {???から / \*でから} 演説を行い、次に市役所前で演説を行った。

動作の場所を表すデ格の場合も道具・手段と同様に、カラとの共起には制約があると見てよいだろう。(24)ではカラについて、受容度がそれほど低くないと判断することもありうるが、「駅前から商店街のほうに向けて演説を行う」のように単純な起点として用いるケースが判断に干渉していることが考えられる。ここでは、デ格とカラは共起しないとしておく。

移動上の起点が複数あれば、それらの集合のうちの序列の筆頭を想定することも可能である。例えば、「富山からと、金沢からと、新潟から出発してもらうことになっているが、最初に新潟から出発し、1時間後に金沢から、2時間後に富山から出発する」という場合には、格助詞のカラと副助詞のカラを重ねた「新潟カラ+カラ」を理論上は想定可能である。しかし、「新潟からから」という形式は許されない。更に、「新潟から出発する」という場合には、移動上

の起点の解釈だけがなされ、序列上の筆頭（最初の行為者）を表す副助詞のカラを読みとることは不可能である。

さきほどのハとモとの融合と同じように表にするならば、以下のように表すことができるだろう。

|        |    |    |    |   |   |    |    |    |
|--------|----|----|----|---|---|----|----|----|
|        | ガ  | ヲ  | ニ  | ト | デ | カラ | マデ | ヨリ |
| カラとの融合 | カラ | カラ | カラ |   |   |    |    |    |

以上、見たように意味と用法の観点からは、格助詞のカラと副助詞のカラには連続性が見られるものの、融合の点では選択的に融合が生じており、不連続な分布が観察できる。広義の「後置詞」は名詞に後接して他の要素との関係を示すものと言えるが、格を純粹かつ限定的に示す専用の要素になっているとは限らず、副助詞に派生するものや、両者の中間的なものも見られるわけである。

このことは、格関係だけを単純に記述したり分析したりするだけでは、後置詞という観点から見る格助詞の実体を正確に捉えられないということでもあろう。本論では、日本語の言語類型論的な特性や関連する統語現象なども念頭に、格助詞を記述し、考察していくことを継続的に行いたい。まず、以下では、格助詞の「が」について検討する。

## 2. 構文的特性とガ格

ガ格について、これをすなわち主格とする記述は、一般的な見解として広く行われている。これについて、ガが対象を表す名詞句に後接する用例などをもって、表層的で誤った見方であることを指摘することもまた、広く行われていると言ってよいだろう。

英語などの西欧語の場合、I / je / ich という一人称単数主格の代名詞は、対応する動詞句をもつ節を形成する場合、原則として、文の「主語」であり、統語形態論的には「主格（形）」と見なされ、意味的には「（動作・行為の）主体」でもある。この「幸福な三項の一致」が「主語」という概念を単純に、また、直感的に捉えることを可能にしていると言っていいだろう。しかし、日本語では、「水が飲みたい」のガの場合、文の「主語」をマークしているかもしれないが、少なくとも「（動作・行為の）主体」ではない。しかも、nominative が主格と訳されこそすれ、実質的には斜格でなく正格、活用形でなく非活用形、有標でなく無標の形態である西欧語の場合と異なり、日本語では、ガ格名詞句も形態論上は他の格助詞を後接させた名詞句と違いはなく、これだけを特別なものと見なす理由がない。（以上については、加藤重広（2004a）も参照されたい。）

## 2.1. ガ格の基幹性

本論では、しかしながら、格助詞のガが他の格助詞と比べて特別な階層にあると見るべき助詞であり、機能論的には有標と見るべき他の格助詞に対して無標と見るべきものであることを述べる。

前節で見た融合におけるガ格のふるまいを考へても、ガが他の格助詞と比べてより明確なある種の特性をもっていることは言えるだろう。しかし、これはガが相対的に特別な地位にあると見ることを支持するだけのものでしかない。

副助詞のハ<sup>2)</sup>の用法のなかに、格助詞の融合とは考へにくいものがあることはつとに指摘されている。

- 25) 「おっ、向こうから煙が流れてくるぞ。…これは、近所のどこかのお宅がさんまを焼いているね」

例えば、この例文におけるハは単純にガで置き換えると不自然になってしまう。既に加藤重広(2003)で分析されていることであるが、「これ」が「向こうから流れてくる煙」を指示する前方照応用法であるとするならば、「近所のどこかのお宅がさんまを焼いている」という後続の節で言い表される事態の途中もしくは結果において生成されるもの<sup>3)</sup>と考へるべきだろう。日本語では、過程随伴物や結果随伴物をマークする格助詞が存在しないが、理論的な仮構として"G"という随伴物をマークする格助詞が存在するものとすれば、(25)の「は」は、「G+ハ」において「G」が消えることで融合が生じて「ハ」が得られたと考へるのが妥当である。これは、格助詞のガにハがついても「ガハ」という形態が存在し得ず、義務的に「ハ」になるのと同じように考へればよい。

では、該当する形態を持たないGがハと融合した結果得られたハであるとする仮説は成立するのだろうか。これは、(25)のハと同じような位置にガが用いられる例文(26)が存在しうること考へれば、棄却せざるを得ない。

- 26) 「おっ、向こうから煙が流れてくるぞ。…これは、近所のどこかのお宅がさんまを焼いているね」「何を言ってるの？ これは、あじの干物を焼いている煙よ。ほら、あっちから流れてくる煙があるでしょ。あれが、さんまを焼いているのよ。」

もちろん(26)はやや特殊なケースを想定しているもので、それほど自然な発話とは言えない面もあるが、これはガという格助詞を用いることの適否をそのまま反映したものとは必ずしも言

---

2) 本論では、係助詞という品詞を想定しないので、ハやモも副助詞として扱う。

3) 加藤(2003)では、「随伴物」と呼ぶ。どの時点で生成されるかにより、「原因随伴物」「過程随伴物」「結果随伴物」に分類されているが、この例文の「これ(=煙)」は過程随伴物か結果随伴物と考へられるだろう。

えまい。(26)のガは、いわゆる焦点のおかれる名詞句を示す談話的効果を持つガであり、「総記のガ」と呼ばれることもある。では、この用法のガが格関係をあらわすのではなく、ハヤモのような副助詞と同じような要素なのかということは、ガ格・ヲ格・二格などで融合による格助詞の消去を起こすかどうかによって検証することが可能だろう。

27) その煙じゃなくて、こっちの煙をよく見てごらんよ。

焦点名詞句を談話的にマークする要素が動作・行為の対象である場合、ヲ格（多くは強勢を伴う）が用いられる。このヲ格の代わりにガ格は使えない。つまり、ガはハヤモのような副助詞とは明らかに統語上の性質が異なっているので、同じ範疇に含めることはできない。このことを踏まえると、(26)において、受容度に関する判断に変異があるにはせよ、ガ以外の格助詞をもってガに代えることが不可能であるのは、すなわち、(26)の「あれ」という随伴物を表す名詞句に格助詞のガを後接させることが許されるということである。これは、以下で検証する例とともに、ガ格の担う範囲が「主体」といった意味役割に限定できないことを意味していると考えられるのである。

ついで、「痛い」という形容詞とガ格名詞句の関係を例に詳細に見てみよう。

28) 転んだのは僕なんだから、君が痛いわけではないよ。僕が痛いんだから。

29) 背中が痛い。

30) 買ったばかりの靴を一日中はいていたので、靴擦れが痛い。

31) 靴に入った小石が痛い。

32) あの関節技が痛いんだ。

33) 胃潰瘍は、空腹の時が痛いんだって。

形容詞を感情形容詞と属性形容詞に二分するなら、「痛い」は前者に分類されるであろう。厳密に言えば、感情ではないので感覚形容詞といったカテゴリを感情形容詞の亜種として立てることは可能だが、そもそも(30)(31)(32)のような使い方は属性形容詞の用法であり、感情形容詞として見るべきは、感情を有したり、その変化を経験したりする「経験主体」としての「君」や「僕」をガでマークしている(28)の場合くらいだろう。(29)は、感覚の生起する場所などと説明されるが、(30)の「靴擦れ」も特定の場所が想定されるので場所と見ることが可能だ。もっとも、「靴擦れ」「小石」「関節技」は「痛い」という経験事象を生じさせる原因（あるいは原因となる現象やモノや行為）と見るべきだろう。(33)では「空腹の時」という時間軸上の位置を表す名詞句にガがついている。

当然のことながら、(28)－(33)でガ格がマークする名詞句を「主体」とすることに意義を見いだすことはできない。むしろ、異質なものを「主体」と一括することで、混乱を惹起したり、



実質の理解から遠ざかることが懸念される。端的に言って、ガ格がマークするこれらの名詞句は「痛い」ということを述べるときに、重要な関わりをもつ要素を表す名詞句なのであって、「痛い」というフレーム(frame)を想定するときに、表現や伝達の際により上位に位置づけられるロール(role)と見るべきものなのである。「痛い」という経験事象があるとき、経験する主体はもちろん重要であるが、誰が経験しても痛いのであれば「みんなが痛い、誰でも痛い」と言うよりも、その経験事象の原因がより重要になってもおかしくない。「痛風が痛い」ということなら、痛みを感じる経験主体よりも作用する原因事象をより重要なものとして表しているわけである。

このように考えるとガ格がマークするのは、基本的に対応する述部によるフレームにおいて重要なロールと位置づけられるものであり、「重要な」要素と見なされるかどうかについては、一定の制約や原理が作用すると考えられるものの、フレームにおける基幹的な要素とする記述はいずれの場合でも適用可能であろう。本稿では、この立場に立ってガを捉えることにし、主格という名称はこれを用いず、**基幹格(cardinal case)**と呼ぶことにしたい。もちろん、動作主体は対応する動詞によるフレームにおいて最も重要な要素であり、典型的な基幹格と見なされる。

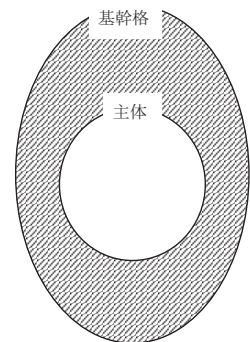
「痛い」などの形容詞によるフレームでは、基幹格と見なされる要素についての制約が緩いと考えられる。基幹格は、当然のことながら、述部と関わりを持つ名詞句のうち意味的に最も重要なものでなければならぬから、格標示のなかで筆頭に位置する「第一格」であると言ってもよいし、また、フレームに関わりを持つ名詞句が1つだけなら無標のマーキングがなされると考えてもいいので、無標の格と説明することもできるだろう。

基幹格の基幹性が、述部のフレームとの関係で決まるということは、解釈によってガ格でのマーキングが許されるものもあるということであり、基幹格のなかにも典型的なものと同様のものがありうるということである。

34) 主役の太郎がすぐに疲れてしまうので、撮影に遅れが出ている。

35) ころころ変わる部長の指示がすぐく疲れるんだ。

「疲れる」という動詞は、経験主体を想定できる点で「痛い」の分析と通じるところがあると考えられるが、(34)では経験主体(あるいは「疲れる」を行為とするなら動作主体)をガでマークしているが、(35)では経験事象の原因をガでマークしている。(35)は、動詞のフレームに対する動作主体を基幹格とする一般的な原理には背馳しているが、周辺的な位置づけにある基幹格と見ることが可能であり、基幹格の担う範囲は単なる「主体」にとどまらないと言うことができる。右図の



ようなものを基幹格のありようとして想定すると、基幹格の典型である「主体」は当然がでマークするわけであるが、斜線部の「周辺の用法」もまた基幹性がある限り、基幹格のステータスを与えられると考えるべきなのである。周辺の用法がどこまで見られるか、また、その制約は何かということは、興味深いテーマであるが、次回稿以降の続篇に譲ることにする。

## 2.2. 基幹性と循環性

基幹格は最重要のロール1つだけに限定されると予測するのは常識的な推論だと思われるが、総主文に見るように日本語には、いわゆる二重主語構文が見られる。また、以下に見るようにガ格は1つの述部に対して複数存在しうる。加藤(2001:99)では、以下のような例文を挙げている。

36) このシャツは<sup>は</sup>、よく洗った方<sup>が</sup>繊維<sup>が</sup>きめ<sup>が</sup>細かいよ。

この例文では、ハも格助詞をもって代えるとすればガになる<sup>4)</sup>。とすると4つもガ格名詞句があり、それを受ける述部は「細かい」という形容詞1つで構成されているということになる。もちろん、従来の総主文の分析では、「きめが細かい」(第4主語+第4述語)を第3述語とする第3主語「繊維が」があり、「繊維がきめが細かい」という第2述語に対して「よく洗った方が」という第2主語が対応し、題目語でもある第1主語「このシャツは」に「よく洗った方が繊維がきめが細かい」という第1述語があるという分析がなされるであろうから、「細かい」という形容詞に非階層的に複数の名詞句が対応するとは見なされないであろう。しかし、ここで重要なことは、同じようなことはガ格でマークされた名詞句にしか生じ得ず、ヲ格を含む他の格助詞では原則として生じないということである。ヲ格では、ある条件の下では二重ヲ格制約に従わないことが可能ではあるものの、それは実は述部に二重性が見られる場合であり、デ格についても一定の条件下では複数の要素の出現が可能であるが、これは各論として検討すべきことだと考えられるので、続篇で論じたい<sup>5)</sup>。

(36)のような複数のガ格名詞句が存在する構文が可能にする原理として、ここでは、構造の循環性があることを主張する。ガ格が基幹格である以上、すべての節に潜在的にであれ、ガ格名詞句は存在しうると考えなければならない。つまり、(37)のような節の基本構造を想定しておく必要があるのである。そして、加藤(2003)で論じているように、日本語において節と句の境界が不分明であることを含みおいても節を成立させる主要部が述部であることを踏まえ、その節の統語的なカテゴリも「述部」と考えるべきであろう。「節」が



4) 受容度は場面や文脈と結びつくのでここでは考慮しない。構造上ガしかあり得ないということである。

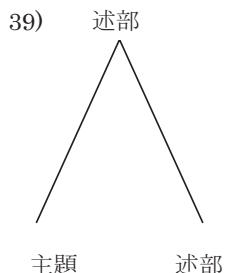
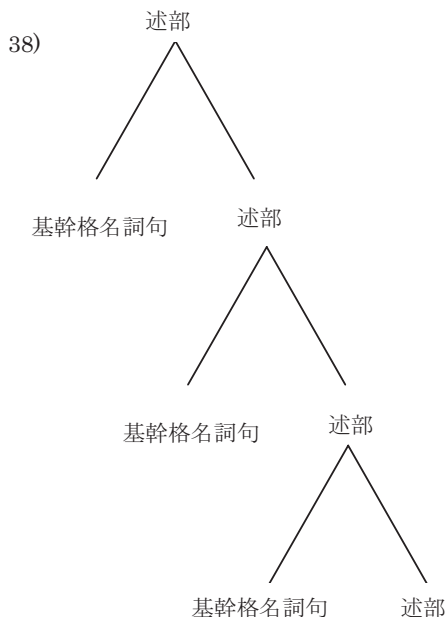
5) 関連することの一部は、加藤(2004c, d)で論じている。

「述部」としての性質を持っているのであれば、ここで循環的(recursive)に構造を拡張することが考えられる。つまり、(38)のような拡張を理論的に想定できるわけである。

(38)では2回ほど構造を拡張しているため、ガ格名詞句がつごう3つ存在できることになる。「よく洗った方が繊維がきめが細かい」などは、この構造をもって説明することができるだろう。

これにさらに循環的に構造を付加すれば、「このシャツが、よく洗った方が繊維がきめが細かい」のような4つのガ格名詞句を持つ構文を生成できる。しかし、日本語の構文において主題の有無が重大な差異を生むことを考えれば、それを記述できるようなモデルであることが望ましい。

主題を持つ有題文と、主題を持たない無題文が存在することを考えると、主題は任意に付加される要素ということになる。しかし、構造モデルとしては、任意の付加よりも空項であることを許容する(つまり、なくてもよい)主題部を持つ構造のほうが記述上シンプルだと考えられるので、以下の(39)のような構造を追加することにする。ただし、主題部とそれに対応する陳述部という構造はそれ全体が文として完結しているべきであることから、陳述部は述語からなるので、単純に主題と陳述の組み合わせ全体を「述部」という統語カテゴリと見なしておく。



「主題+述部」全体も「述部」であるので、(39)のような構造に(37)のような構造を循環的に追加することも考えられる。この規則は、「ゾウが鼻は長い」のような文を生成できることを考慮すると必要な規則だと言えるだろう。また、(39)において「主題」は空項であってもよく、その場合は「無題文」となる。主題に有効な要素が存在している場合は「有題文」となる。

しかし、一般に1つの文に主題は1つであり、ハでマークされた名詞句が複数あるとき、文頭に最も近い最左方の名詞句が主題解釈を受け、そのあとに続くハでマークされる名詞句は一般に対比解釈を受けることになる。もちろん、最左方のハ名詞句が対比と解釈されることもある。

この点については、以下のような修正規則を追加しておけば対応可能である。

40) 構造上最上位にある主題要素のみが、主題解釈を受けられる。

このことは、最上位以外の八名詞句は主題解釈をブロックされるということであり、最上位の八名詞句であっても、主題解釈を受けずに対比解釈を受けることを妨げられないということでもある。もちろん、主題と述部の関係が成立するには、菊地康人(1993)に指摘されるように一定の条件がある。

### 2.3. まとめ

本稿は、格助詞を考察する端緒となる問題を検討し、ガ格を基幹格とすることを提案し、あわせてガ格が複数存在しうる構文が日本語にあることを、一定の構造が循環的に適用されることで説明することを提案したものである。とは言え、ここまででは仮説的な提示にとどまっていることから、この提案の論証と、ヲ格以下の格助詞の扱いについては、続篇で述べたい。

#### 【参考文献】

- 糸井通浩(2002) 「日本語助詞の体系」 玉村文郎(編)『日本語学と言語学』 明治書院, pp.24-37
- 加藤重広(2001) 『日本語学のしくみ』 研究社
- (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- (2004a) 「主語という陥穽 —「私は」と書き始めるとき—」『国文学 解釈と鑑賞』2004年6月号 学燈社
- (2004b) 『日本語語用論のしくみ』 研究社
- (2004c) 「場所格「を」の意味・用法とその周辺」『日本語文法学会第5回大会発表論文集』日本語文法学会(関西学院大学)
- (2004d) 「推意の固着と強さ」『日本語用論学会第7回大会発表予稿集』日本語用論学会(甲南女子大学)
- 菊地康人(1991) 「XはYがZ構文の成立条件について」『國廣哲弥教授退官記念論集 意味と文法の間』くろしお出版
- 渡辺 実(1973) 『国語構文論』 塙書房